中学校校歌によまれている西宮市域の地域環境

The regional environment of Nishinomiya city, included in junior high schools' songs

古岡 俊之

FURUOKA Toshiyuki

武庫川女子大学　学校教育センター年報

第４号　2019 年

【原著論文】

中学校校歌によまれている西宮市域の地域環境

The regional environment of Nishinomiya city, included in junior high schools' songs

古岡俊之*

FURUOKA, Toshiyuki*

要旨

2017 年（平成 29 年）告示の改訂学習指導要領は「資質・能力」の育成を目指すものである。中学校校歌詩の比較で思考力や判断力，表現力の育成のためには追究の視点（位置，場所，人間と自然との相互依存関係，空間的相互依存関係，地域）を生かした問いが重要である。どこに？(位置)，どのように？(分布)など分布の規則性や傾向性を読み取る活動を通して，事象や場所の一般性や共通性，地域差を見いだす。またどのような？(場所)と，場所の自然的条件や社会的条件を明らかにし，場所や地域についての事実認識をもつ。そして，なぜ？と地域という枠組みの中で，多面的・多角的に考察することが求められる。最後にどうなるか？どうするべきか？(地域)，その地域は将来どのような姿になっているべきか，そのために私たちはどう行動すべきなのか，特に地域環境の将来像を公正に選択・判断する力を養うことが大切である。

キーワード：次期学習指導要領　中学校校歌　自然　地域環境　地理学的景観

1　はじめに

第 100 回記念の全国高等学校野球大会。校歌を歌う秋田のチームの姿が感動を呼んだ。

校歌は，その学校の校風を発揚するために，学校にとっては重要な教材で，入学式，運動会・体育会，卒業式などの主な行事には，欠かすことのできない歌である。そのため，校歌の制定には，各学校ともきわめて慎重に臨んでいる。また，校歌は在学時代を通して，最も多く歌われる歌であることから，全校の児童生徒が校歌の歌詞を暗唱しているほどである。あるいは母校を卒業してからも，在学時代を懐かしみ，母校の校歌を，誰しも口ずさむことがあるものである[(1)]。

校歌には，次世代を担う子どもたちのアイデンティティー形成に効果があるとされている[(2)]。校歌には多く地域環境が歌われるが，地域環境の保全が求められている今日においては，校歌とそれが果たす役割は大きい[(3)]。

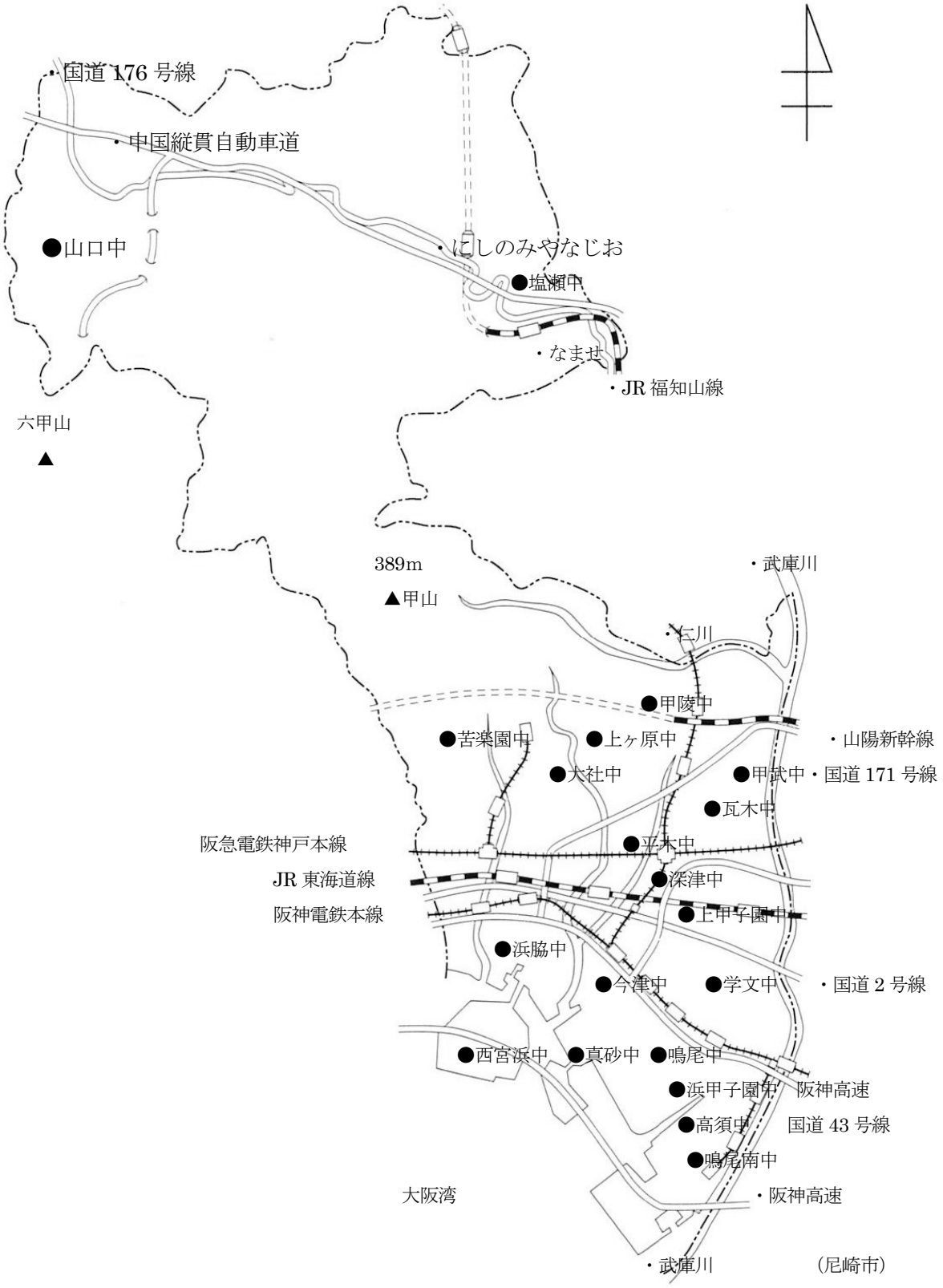
校歌に関する研究は様々な分野でなされている。教育学，音楽学，建築学などでも校歌を対象とした研究がある。地理学では，朝倉隆太郎による全国の中学校校歌の研究[(4)]に代表されるように，山々など校歌に歌われる自然要素の地理的分布と学校との位置関係が検討されてきた。ただし，地理学教材としての価値については言及がない。

最近になって，須原洋次が京都の景観について分析し，地域理解のみならず，持続可能な開発のための教育(ESD)のねらいから態度形成を含めた教育実践の提案をしている[(5)]。

西宮市内には，現在市立幼稚園が 18 園，小学校が 41 校，中学校が 20 校，特別支援学校が 1 校と市立高等学校が 2 校の，計 82 校園ある。さらに最近閉校になった小学校 1 校がある。これらを合計すると 83 校園になる。拙論として，この 83 校園の学校園の校歌によまれているところの自然環境，

＊ 学校教育センター非常勤講師

人文環境などを分析して，西宮市の地域環境の特色の解明を試み環境学習教材としての可能性について論じたものがある[(6)(7)]。



第 1 図　西宮市立中学校位置図

２　研究の目的

本研究は，地理学からの校歌研究として，兵庫県西宮市の公立中学校の校歌を取り上げ，地域環境と校歌との関係を考えてみたい。歌詞の内容整理・分析をしてみると，その学校が（1）所在している地域の環境，（2）目標としている教育目標，校訓，期待する教育像など教育理念が織り込まれていることがわかる。

本稿では，学校を取り巻く山，川，海などの地形環境と，気候・風土，さらに動物，植物などを含めた自然環境，また，その学校に深い関係のある産業や史跡などの人文環境から，西宮市の地域環境を，次期学習指導要領の趣旨を踏まえた中学校における社会科教材の可能性について考察する。

３　研究方法

研究資料としては，西宮市立各中学校が，平成 20 年 4 月に発行した『学校要覧』を用いた。幼稚園，小学校については既に研究報告をしているので中学校 20 校を研究対象にした。

校歌を分析する項目の選定については，鳴尾中学校の校歌をサンプルにして分析した結果，次のような 9 項目を選び出した。

①　山，②海，③河川，④風，⑤所在地名，⑥動物，⑦植物，⑧史跡，⑨産業

校歌を分析した結果を，項目ごとにプロットして，その分布の地域的差異などを考察した。このように項目ごとに地図化してみると，地域の特色を明瞭に把握することができた。

４　校歌によまれている地域環境の分析

（1）　山

校歌に山の地名は，19 校と最も多くよまれている。以下各「山」ごとに記すことにする。

六甲山は，浜脇中の「六甲の峰　とこしえに　ゆるがぬ姿　仰ぎつつ…」のように，西宮浜中，上ヶ原中，瓦木中，学文中，山口中など 13 校がよんでいる。また，苦楽園中の「緑濃き　武庫の山辺」，今津中の「仰ぐ山脈」，塩瀬中の「武庫の山なみ」のように，暗に六甲山をよんでいる学校もある。

甲山は，甲陵中の「仰みよ　甲の御山　まどかなり…」と，大社中，甲武中など 3 校ある。あるいは大社中のように，二番に「六甲の秀峰仰ぎつつ」，三番に「まろき心や甲山」のように，同一校の校歌に両山を順によんでいる学校もある。

六甲山や甲山を校歌によんでいる学校には，位置的には大社中，甲陵中のように山のふもとにある学校または両山を眺めることができる学校，あるいは視覚的に不可能でも，隣接地などに所在しているため，遠足・旅行的行事など校外学習の場となるなどの学校がある。

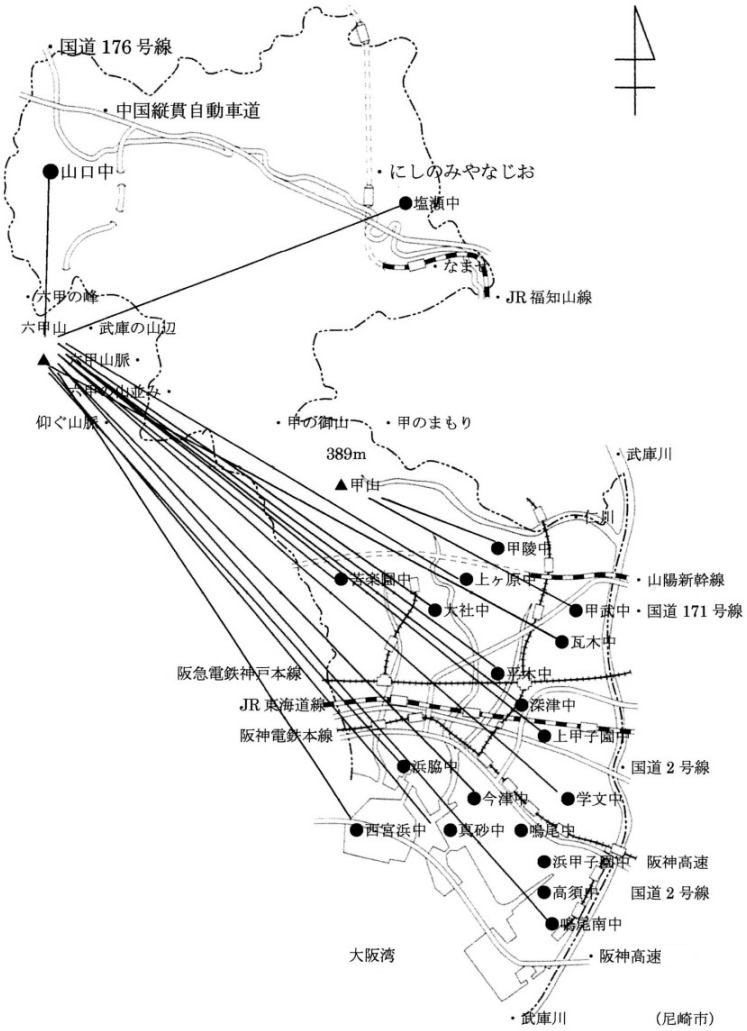
六甲山は，海抜 931.25 メートルあって，兵庫県南東部，大小の山を含む六甲山系全域(狭義には中央部から東部)を指し，最高峰は特に六甲(山)最高峰と称される。山域は神戸市のほか，芦屋市，西宮市，宝塚市に属す。甲山は，309.2 メートルで兵庫県西宮市西北部に位置する，古い火山の痕跡である山で，両山は西宮を代表する著名な山であるところから，多くの学校の校歌によまれているものと考えられる。

その他，山地のことについて山名は表記しないが，今津中の「仰ぐ山脈」のようなものが，苦楽園中，塩瀬中などにもある。

以上のように，山はほとんどの学校の校歌によまれていて，六甲山や甲山などのように独立した山と，六甲の山脈や武庫のやまなみのように連続した山系の二つに分けることができる。

第１表　西宮市域内の校歌によまれている地域環境

地　　名	数	%	備　　考
山	19	23.0	六甲山(13)　甲山(3)　武庫の山辺(1)　仰ぐ山脈(1)　武庫の山なみ(1)
海	13	15.9	ちぬの海(3)　ちぬの裏わ(3)　潮(潮(3)，新潮，潮騒，潮路)(6)　浦波，瀬戸，鳴尾浜(2)　今津浜(1)
所在地名	11	13.4	町名，地域名
河川	9	11.0	武庫川(8)　せせらぎめぐる有馬路(1)＜有馬川＞
風	8	9.8	「風(2)」「浦風」「浜風」「風光り」「しおかぜ」「武庫の浜風」「海風」
植　物	8	9.8	「緑」「森」「桜」「松」「竹」「梅」「枝葉」「木立」
動　物	7	8.5	ちぬ
史　跡	4	4.9	有馬路(2)，公智の森(1)　灯台(1)　甲子園(1)
産　業	3	3.7	農に生きる　竹編む　紙すくわざ
計	82	100.0	



第２図　西宮市域内の校歌によまれている山

（2）　海

海については，9 校と，山に次いで河川とともに多くの学校の校歌によまれている。

海が校歌によまれていない学校は，上甲子園中，平木中，瓦木中以北の山口中，塩瀬中など，海を可視することのできない地域の学校である。

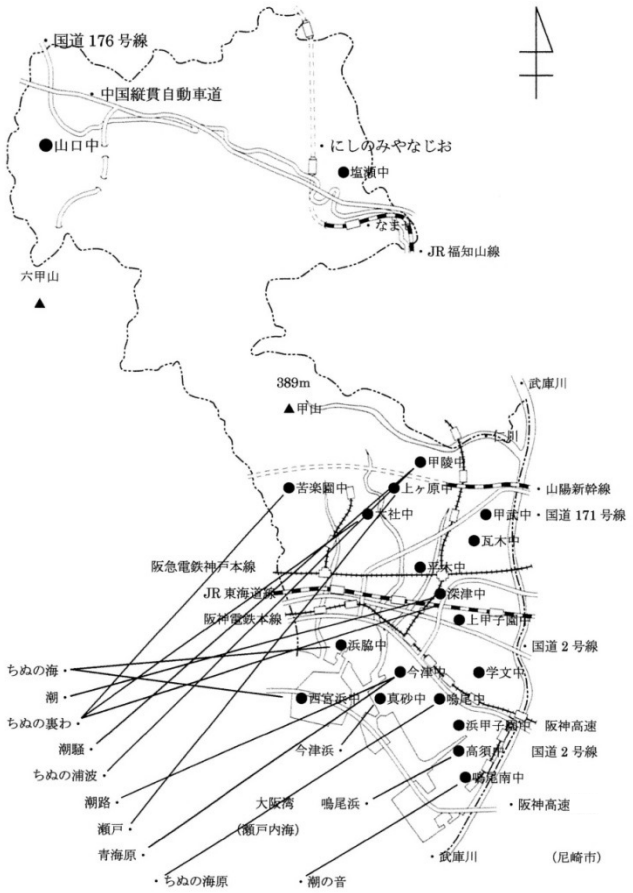
海が校歌によまれている学校の北限は甲陵中であって，校歌の 3 番に「見はるかす　ちぬの浦波　潮騒の　巷を外に　雄々しくも」とある。学校から瀬戸内海(大阪湾) まで，直線距離にして約 8 キロメートル余であるが，甲陵中の所在地からは，瀬戸内海を直接見ることはできない。それだけに，瀬戸内海に対するあこがれの気持ちがよまれている。

海については，瀬戸という固有名詞で校歌によんでいる学校は，上ヶ原中の 1 校である。しかし，次のように，瀬戸内海とその学校の所在地との関係が，区別してよまれていることは興味深いことである。

真砂中の「朝焼け映ゆる　今津浜」のように，学校と海とが接近している状況を校歌によんでいる学校に，鳴尾南中，高須中などがある。

阪神淡路大震災後にできたマリナパーク西宮浜にある西宮浜中は，1 番に「朝日輝く　ちぬの海　浜風香る　さわやかに」，3 番にも「夕日を仰ぎ　大海の　水平線の　果てしなく」と校歌によんでいる瀬戸内海との距離はわずか 3～400 メートルである。この地域には西宮ヨットハーバーがあり，かつて冒険家堀江謙一氏が太平洋横断の旅に出た際の出発地でもある。

また，海の範囲を狭めて，生徒たちが日常親しんでいる地名を校歌によんでいるものがある。



第 3 図　西宮市域内の中学校校歌によまれている海

鳴尾南中「潮の音　満ちる鳴尾浜」，高須中「鳴尾の浜に　かかる虹　仰ぎてめざす　高き夢」，真砂中「希望豊けき　灯台に　朝焼け映ゆる　今津浜」などがある。前記の瀬戸，見はるかす，ちぬの海などよりも，地域の範囲を狭めて，対象とする地域の焦点化を図ったものと考えられる。

以上のように，海については，海の見えない地域の学校を除いては，多くの学校の校歌によまれている。そして「ちぬ」の海，浦わが大部分であり，瀬戸内海と西宮地域との歴史的な関係を示したものが多い。しかし，若干ではあるが，その学校が所在する地域的呼称名の海もあり，これはその学校と海との，親密度の表現と考えられる。

（3）　所在地名

校歌の性格上，その学校が所在する場所や，位置を示すための名勝がよまれていることは，最も基盤になるものと考えられる。

苦楽園中「緑濃き　武庫の山辺に」，甲陵中「みどりの台地」など，一般には通常使用されていない名称もある。これらの名称の使用は，校歌を作詞する上での，表現手法からのものと考えられる。武庫の山辺は，緑豊かな六甲山麓にある学校を意味しており，みどりの台地は，江戸時代に農業用地として開発された上ヶ原台地の上にある学校という表現であると思われる。

校歌に，学校の所在地を示すための名称には，学校が位置している地名をそのまま直接によんだものと，作詞の表現手法上からつくられた地名がある。

（4）　河川

校歌によまれている河川は，2 河川，9 校である。これは河川の分布が，限定されているためと考えられる。

武庫川が最も多くて 8 校ある。甲武中「武庫の流れに　いだかれて」，瓦木中「武庫の川水あの音は　進む未来のほめうたか」，上甲子園中「今日も明るく　たゆみなく　流るる音よ　武庫川は」，学文中「流れは清き　武庫川の　源遠く　知らねども」などで，武庫川が学区内や近接地にある学校の校歌である。

学文中の「流れは清き　武庫川の　源遠く　知らねども　求めて深き　若人の　叡智の道は　ひとすじに　勤めて得ざるものあらじ」は「ひとすじに　勤めて得ざるものあらじ」ということと，武庫川のひと筋の流れとをかけ合わせた表現と考えられる。学文中学校と武庫川とは，直線距離で東に約 300 メートルにある。

山口中の「せせらぎめぐる有馬路」は，有馬川を指しているものと考えられる。有馬川は，山口中の 1 校だけが校歌によんでいる。上流には日本三大古湯の一つである有馬温泉があり，ここを源流とする。ホタルの生息地として市内外によく知られており，毎夏，観賞に訪れる人が多い。有馬川流域には山口中学校 1 校しかないところから校歌によまれるのも本校のみである。

以上のように河川を校歌によんでいる学校は，河川の近くに位置した学校である。ただし深津中のように，武庫川と隔たっている学校でも，「武庫の清流　風さやか」のように観点を別にしてよまれている校歌もある。

（5）　風

風について，よまれているものの中には，風そのものと，風と土地とを一連のものとして，とらえたところの風土としてよんだものとがある。本稿ではこれらを一括して述べる。その数は 8 校あって

4 番目に多い。

風については，浜脇中の「武庫の浦風　高らかに」，西宮浜中「浜風香る　さわやかに」，真砂中の 1 番「かがやけかがやけ　真砂　しおかぜに」，2 番「のびゆけのびゆけ…しおかぜに」，3 番「はばたけはばたけ…しおかぜに」，高須中「武庫の浜風　胸に受け」，学文中「海風そよぐ　さわやかさ」など，大阪湾から吹いてくる「浜風」や「浦風」，そして「しおかぜ(潮風)」をよんだ校歌がある。

また，甲陵中「風光り　みどりの台地　ふくいくと」，深津中「武庫の清流　風さやか」のように，風を明るく温かくよんでいる校歌もある。地域の環境を風土的な把握のしかたとして，「風，空，山」「海，波，山，風」「桜，松，竹，梅」「風，森，光」などの要素からとらえている。

（6）　植物

校歌によまれている植物には，大社中「松の翠影色すがし」，上ヶ原中「桜はかおる　文教のまちはわが郷」，甲陵中「匂う梅が香　頬笑みて　ここに語らん」，山口中「竹編む業を　伝えたる」などがある。

甲陵中の梅は，西宮市の梅の名所「甲東梅林」を指すのであろう。大阪で貿易商を営んでいた芝川又右衛門が 1896 年に，この地で果樹園経営を始めた際に，ブドウ，柿，桃などの果樹の他，梅，桜，楓，楠などの植栽を行ったことが始まりとされる。

以上のように，校歌によまれている植物には，「梅」「竹」などの地域性が著しいものと，地域的な関係というよりも，その学校のシンボルといった意味合いのものがある。

（7）　動物

動物のうち，校歌によまれている魚類には，浜脇中，西宮浜中の「ちぬの海」，大社中，苦楽園中，深津中の「ちぬの浦わ」，甲陵中「ちぬの浦波」，鳴尾中「ちぬの海原」とちぬ(クロダイ)のみが 7 校でよまれている。

ちぬはチヌでタイ科に分類される種である。東アジア沿岸域に分布する大型魚で，食用や釣りの対象として人気がある。日本ではクロダイの別名としてよく用いられる。海から離れた地域にある学校の校歌にもよまれている。これは学校が所在する西宮地域がえびす神社とゆかりが深い地域であることの特性が顕著に表れている。

（8）　史跡

校歌の中に，その学校や地域の歴史的事項をよんだものがある。

山口中の 1 番「せせらぎめぐる有馬路の」，2 番「公智の森の史著るく」，塩瀬中「武庫の山なみ　有馬路の　木々のみどりに　照りはゆる」は，山口，塩瀬の両中学校は隣接校で，歴史的内容を同じくする学校である。公智は公智神社を表し，兵庫県西宮市山口町にある神社である。創建年月日は不詳であるが，孝元天皇の皇子大彦命末裔久々智氏が木の祖神久久能智神を氏神として奉祀したのが始まりとされている。有馬路は有馬街道のことで，大阪や神戸から有馬温泉に至る街道の名称である。歴史的に 4 つのルートがあったうちの一つである。このルートは最も歴史が古く，有馬温泉へ行く天皇や貴族，武家が往来したとされる道である。塩瀬から山口にかけては，有馬温泉への大事な道筋として，歴史の里といえる地域である。

真砂中「希望豊けき　灯台に　朝焼け映ゆる　今津浜」の灯台は，今津浜にある今津灯台である。今津郷の酒造家であった長部家によって 1810 年(文化 10 年)に設置され，樽廻船による日本酒をはじ

めとして，木綿，干鰯といった荷を積んで今津港を出入りする船の安全を守っていた。

鳴尾中「若き心のあこがれの甲子園」の甲子園は西宮市甲子園町にある野球場。通称「甲子園球場」または「甲子園」。もともとあった枝川の中州を埋め立てて作られた球場である。全国高等学校野球選手権大会の会場としてあまりにも有名になっている。

（9）　産業

校歌の中に，その学校の地域の地場産業をよんだ学校が 2 校ある。

山口中「土に祈りて　農に生き」，「竹編む業を　伝えたる」，塩瀬中の「紙すくわざに　なりわいの」などは，地域の主な産業である農業，竹細工業，紙漉き業を校歌によんだものである。

しかし，有馬川下流平野である山口の稲作も，畑の主要作物であった山口中学校区の花卉栽培もまた，紙漉き業を村の誇りにしてきた塩瀬地区の農業も，昭和 30 年代からの都市化の進行は，これらの農耕地に，阪神流通センターなど大型倉庫や工場，住宅が建設されて，地域の産業形態も景観も大きく変容している。今は，校歌の歌詞の中に，歴史的遺産として，農業，手工業名が名残りをとどめているといえる [8]。

また，「竹編む作業を　伝えたる」の竹編む作業の結果としての「有馬篭」は，地元に生息する竹を使った竹製品で，山口で作られ始めたのは江戸時代の中頃とされている。明治時代に茶の輸出にあたって，茶の入った容器の入れ物として利用することがきっかけで，伝統的な技術が高く評価され，新たな技術の開発によって「かばん」「花篭」「買い物篭」などが生産されるようになり，山口の竹篭としてその名声を高めた [9]。

塩瀬中の「紙すき」は，耕地が乏しく農業がじゅうぶんできないとすれば，何か他の産業を興さねばならない。それが農耕の合間に行う手工業で，この地方では紙漉きであった。最初のころ，名塩の村で細々と始められたが，江戸時代の中期からしだいに発展し，明治時代の初めまでは，村を支える重要な産業になっていた [10]。

５　地理学的景観から見た校歌

（1）　地理学的な景観

一般的な意味での景色や風景は，「美しい景色だ」と感嘆したり，あるいは「変化のない平凡な風景だ」などといったとらえかたであって，これらは主観的な把握の仕方といえる。

しかし，地理学的に研究の対象とする風景は，客観的に把握された風景ということで，景観という概念で説明されるものでなければならない。景観は肉眼による視覚によって認知されることは，景色と同じであるが，景観は見た姿そのものの姿ではない。すなわち地理学における景観は，景色を客観的に把握して，主体との関係についてとらえるところのものでなければならない。

したがって，景観ということを定義づけると，「主として視覚によって認知された場所の外観」と言える。それは可視的な範囲で，構成されている風景を対象とする。景観を研究する最小単位は，機能関係が均質で，一定の立地関係を有するものとされている。例えば，一つの山地においては，山頂，谷壁，谷底などが単位となる。

景観を考察するためには，客観的な分析を基本姿勢として，野外での観察，地図，空中写真，文献などを資料として行う。そして形態学的方法を用いて，個々の景観の分析と比較を行って，地理的な特徴を顕出することである。そのためには野外における風景を，鋭敏に観察して，これを迅速にして正確に，形態的に分析する能力が要求される。

（2） 校歌によまれている西宮地域の景観

第 2 表　自然の見られ方の区分

近景	一本一本の樹木の葉，幹，あるいは枝ぶり等の特徴が視覚的に意味を持つ領域。距離にして 300m 以内で見られる。
中景	一本一本の樹木の樹冠を見分けることができるが，枝ぶり等はもはやとらえることのできない領域。距離にして約 300m～4 km で見られる。
遠景	一本一本の樹木の樹冠は，もはや見分けることはできず，大きな植生分布の変化や沢や谷が目につき，稜線などの地形のアウトラインが視覚対象になる領域。距離にして約 4 km 以上で見られる。

西宮市域内の公立中学校 20 校の校歌について，前記のような考え方から，地理学的な景観分析を行った。

風景を観察して，客観的な分析を行うためには，一定の尺度が必要である。フィンランドのグラニョー教授の研究があるが，これを改訂したと考えられるものに，環境庁が第三回自然環境保全基礎調査として，全国の「自然景観資源調査」をした際に，景観分析の視点として使用したものが第 2 表である [11]。

前記の近景，中景，遠景の三視点から，西宮市域内の中学校 20 校の効果を分析したものが第 3 表である。

全般的なことでは，近景が 24.6%と最も少なく，中景が 36.1%，遠景が最も多く 39.3%である。その理由と考えられるものについて，近景，中景，遠景の順で考察した。

① 近景は，学校から 300 メートル以内の景観ということから，学校の所在地，または学校付近の景観が，校歌によまれているところに特徴がある。

最も多いのが，浜や海の 2 校でその学校が所在する土地のことを示している。たとえば真砂中の今津浜，西宮浜中のちぬの海などである。大阪湾のすぐ近くにある，学校の校歌によまれている。後は各 1 校で学校の近くを流れている川，みどりの台地，田畑が校歌によまれている。甲武中の「武庫の流れ」，甲陵中の「みどりの台地」，塩瀬中の「田に畑に」などがそれである。

② 中景の景観が校歌によまれている項目は 22 で，全景観の 36.1%を占めて 2 番目に多い。

中景の景観のうちで，校歌に最も多くよまれているのは瀬戸内海(大阪湾)で 8 校ある。海岸部の学校が主であるが，浜脇中「文化いきかう　ちぬの海」，高須中「潮の息吹き　生き活きと」などが例としてあげられる。

中景の第 2 位は河川で，武庫川が 7 校の校歌によまれている。たとえば，上甲子園中「今日も明るく　あゆみなく　流るる音よ武庫川は」，学文中「流れは清き　武庫川の　源遠く　しらねども」，深津中「武庫の清流　風さやか」，瓦木中「武庫の川水あの音は　進む未来のほめうたか」などがある。

また山が「甲山」「甲の御山」のように，単独で存在する山の景観として，2 校で中景によんでいる校歌がある。大社中「まろき心や甲山」，甲陵中「仰みよ　甲の御山」がその例である。

その他，次のような特色ある景観が中景として学校の校歌によまれているということは，地域の特性を示すものとして，きわめて興味深いものと考えられる。たとえば西宮浜中「青空高く帆を広げ」，鳴尾南中「潮の音　満ちる鳴尾浜」，高須中「鳴尾の浜に　かかる虹」，山口中「公智の森」などがある。

第 3 表　西宮市域内の校歌によまれている景観

校種	校数 ＼ 景観別	近景	中景	遠景	計
		0~300m以内	300~4000m	4000m以上	
中学校	20	15	22	24	61
%		24.6	36.1	39.3	100.0

③ 遠景の景観が校歌によまれている項目は 24 で，そのうち 15 が山，6 が海で河川は 1 件もない。山の内訳は，六甲山 14 校，甲山 1 校である。

六甲山は，鳴尾南中からは「はるけき　六甲山脈に　高き理想の灯と燃える」とあるように，北西に 20 キロメートルの山脈が遠望でき，その夕映えの景色は素晴らしい。しかし，塩瀬中から六甲山の山脈は可視不能であるが「六甲の峰みはるかし」のように，若人の高い理想を六甲山に託した表現と考えることができる。六甲山頂は，西宮市域内の学校からは可視不能の山であるけれど，多くの学校の校歌によまれている。たとえば，今津中「仰ぐ山脈　日はただ一つ」，平木中「せいうん　ろっこう　あおぎつつ」，学文中「六甲の山脈空に　さやかなり」などがあり，学校付近の景観を示すために，校歌によまれたものと考えられる。

以上のように，校歌によまれている景観は，第 4 表のようにまとめることができる。校歌によまれている海(瀬戸内海)は，近景と中景，遠景のいずれにもあるが，大部分が中景（8 校）にある。また，山は近景，中景に少なく，山は遠景 15 校で最も多い。西宮地方の西方の山々が連なっている地形を，景観として適切に表現したもので，そのとらえ方は的確である。

第 4 表　西宮市域内の校歌によまれている景観の海と山と川

種別 ＼ 景観別	近景	中景	遠景	計
海	3	14	6	23
山	3	2	16	21
川	1	7	0	8
計	7	23	22	52
%	13.4	44.2	42.3	100.0

６　中学校社会科教育の教材としての校歌詞

（1）　目指す資質・能力と指導内容の考え方

「C 日本の様々な地域」「(4)地域の在り方」について，内容及び内容の取り扱いは次のように示されている[(12)]。

ア　知識および技能の習得

(ｱ) 地域の実態や課題解決のための取り組みを理解すること

・地域には，例えば,自然環境の保全について，地理的な事象として捉えることのできる実態があり，持続可能な社会の構築を踏まえてそれらの実態から生じる課題に向けた議論や取り組みを行うことができる。

(ｲ) 地域的な課題の解決に向けて考察，構想したことを適切に説明，議論しまとめる手法について理解すること。

・校歌の歌詞分析から，実際に観察や野外調査を行うことも考えられる。観察や調査の結果をまとめる際には，地図や諸資料を有効に活用して事象を説明したり，自分の解釈を加えて論述したり，意見交換したりするなどの学習活動をさせる。このような学習展開を通して，地域的な課題の解決に向けて考察，構想したことを適切に説明，議論し，まとめる手法について理解していく。

イ　思考力，判断力，表現力等の育成

(ｱ) 地域の在り方を，地域の結びつきや地域の変容，持続可能性などに着目し，そこで見られる地理的課題について多面的・多角的に考察，構想し，表現すること

・地域環境や，そこで見られる地理的な課題，その課題解決のための取り組みについて，多面的・多角的に考察し，地域の将来像について構想していく学習展開が考えられる。

その際，自分の解釈を加えて論述したり，意見交換したりするなどの学習活動を充実させていくことに留意する。

（２）授業展開例

学習課題については，2017 年(平成 29 年)に示された新学習指導要領「中学校社会科」において自然環境の保全，人口の増減や移動，産業の転換や流通の変化，伝統文化の変容などの実態や，その解決に向けた取り組みなどが例にあげられている [13]。

地域の安心・安全，持続可能などに着目して，地域の課題は何か，またそれぞれの課題を解決するにはどうしたらよいかを考え，地域のあるべき姿を構想するような学習が期待されている。

その際，クラスを課題別に分けて，各課題やそれぞれの解決策をポスターにまとめるなどして，クラスでポスターセッションを行うような学習指導を行うこともできる [14]。

地域の課題について構想する学習展開での課題設定例と，構想したことをモデル図にまとめた例を次に示す。

学習課題例　山に降り，川となって流れてくる集中豪雨による河川の氾濫に対して，どのような対策をとっておけば，安心・安全な避難経路が確保できるのだろう。

武庫川を教材に取り上げた場合の社会科学習の一例を示す。1975 年の創立，武庫川本流にほど近い学校である。校歌が制定されてから 40 年余りの歳を重ねている。1 番の歌詞は次のとおりである。

武庫の流れに　いだかれて　よろこびの朝　かがやけり
生き生きと　美しく　若き血潮の　集い来て
築く力を　いしずえに　甲武　甲武　甲武中学校

西宮市立甲武中学校　河村陽子作詞・吉田　保作曲

・過去に武庫川は氾濫が起きている。
・避難所周辺は水田が多く，避難経路が冠水する。
・水田の辺りは街灯が少なく，夜は暗い。
・用水路と道路との境にガードレールがない。

⇒ 適性数の街灯の設置
ガードレール・標識等の設置

⇧

避難経路は，豪雨の際，夜，視界が悪く，第二次災害の恐れがある。

中学校校歌から，人間と自然との豊かな相互依存関係，空間的相互依存関係への期待がよみとれる。日々の校歌斉唱の教育活動を通して，場所の自然的条件や社会的条件を明らかにし，場所や地域についての事実認識を持たせることができる。そして，なぜ？と，地域という枠組みの中で，多面的・多角的に考察することができる。学校創設時と比べて，どのような環境変化が起こっているのか，この場所がどうなるか，どうするべきか，その地域は将来どのような姿になっているべきか，そのために私たちはどう行動すべきなのか，自身や地域の将来像を公正に選択・判断する力を養うに適切な教材の一つにあげていくべきものである。

7　おわりに

本稿は，先行研究に倣い,西宮市域内の公立中学校 20 校の校歌について，西宮地方の地域環境がどのようによまれているかについて分析した。さらに西宮地方の地域の特性を考察し,社会科の教材として活用するための方法についても検討してみた。

以下に，その要約と成果を示す。

（1）　20 校の校歌によまれている地域環境は，掲出頻度の多い順に記すと，次のようである。

①山，②海，③学校所在地，④河川，⑤風，⑥植物，⑦動物，⑧史跡，⑨産業，⑩その他の 10 要素で，その合計は 80 であった。

（2）次に，その他を除いて 9 項目を，地理学的な景観から，近景，中景，遠景の 3 つの尺度を設定してみた。

（3）以上のような分析によって，次のことが明らかになった。

① 山と海が，地域環境の分析において最も多かったが，この山と海とは，次に考察した「地理学的景観からみた校歌」でも量的，質的にも大きなウエイトを占めていた。これは西宮市の海岸線が東西約 5 キロメートルを有することと，西宮市域の北西方向から北部にかけて六甲山地が横たわっていること，市のほぼ中央辺りに甲山が位置している地域の実態が，校歌の中にもよまれているものと考えられた。

② 河川，植物，動物，史跡が校歌によまれている数は少ないが，質的にはそれぞれの学校との関係が緊密なもので，地域的な特性の顕著なものといえる。

③ 風を風土として校歌をよんだものは，明るく，温かく好意的にとらえている。しかし，浦風，浜風，潮風など，西宮地方の特色のある地方風をよんだ校歌も数校ある。

④ 産業については，山口町の農業とその合間に行われていた竹細工，塩瀬町名塩の紙漉きが校歌によまれている。都市化が進んだ現在では当時の面影はきわめて薄くなっているが郷土を考える意味で大切な意味があると考えられる。

⑤ 地理学的景観から，20 校の校歌を，近景，中景，遠景の 3 つの尺度から分析してみると，頻度数がもっとも多いのは中景で，次が遠景であって，近景が最も少なかった。近景によまれている景観は，学校の所在する場所が多く，中景では海が多く，次いで山(甲山)であった。そして遠景によまれている景観は山と海で，その内訳は 7 割程度が六甲山地，あとの 3 割が瀬戸内海(大阪湾)であるところに，西宮の地域の特性があらわれている。

最後に，新学習指導要領の完全実施が近い。校歌詞は地域環境を知る唯一の手掛かりとなる。改訂の趣旨を踏まえた課題設定，授業構想に組み入れられる教材であると考えられる。

今後の課題として，地域環境を規定する地形，気候，都市化の度合い等の異なる地域を対象に，気候や季節を含めた環境と持続可能性との関係について検討していきたい。

注・引用文献

(1) 朝倉隆太郎『山と校歌―中学校校歌に歌われている山地』二宮書店，1999 年，400p.

(2) 宮島祥子「校歌の文化的役割」『京都文教短期大学研究紀要 47』，2008 年，pp.90-96.

(3) 月原敏博・大須賀千種「校歌で何を歌うか？―福井県内小学校の校歌と地域環境―」『福井大学教育地域科学部紀要 (1)』2011 年，pp.167-180.

(4) 前掲(1)に同じ。

(5) 須藤洋次「校歌に見る京都の景観」『龍谷教職ジャーナル』第 5 号，2017 年，pp.97-110.

(6) 古岡俊之「西宮市立幼稚園の園歌における山と川について」『研究紀要』第５巻第２号，西宮市立子育て総合センター，2006 年，pp.1-7.

(7) 古岡俊之「西宮市立小学校校歌の中の山と川をめぐる環境教育の可能性―環境学習材の視点から―」『学校教育センター年報』 第２号，武庫川女子大学学校教育センター，2017 年，pp.45-59.

(8) 西宮市「三章　西宮地方の商品生産　(一)　農業の発達」『西宮市史　第二巻』，西宮市，1960 年，pp.147-183.

(9) 前掲(8) 「(六)山村の手工業」，pp.329-372.

(10) 西宮市教育委員会「近世の西宮地方」『西宮市の歴史』文化財資料第三一号，1988 年，pp.97-99.

(11) 環境庁「自然景観資源調査要綱＜別紙１＞自然景観資源調査実施要領　3　調査の内容　④眺望性」『第 3 回 自然景観資源調査報告書』，1986 年，1987 年に調査，1989 年，　pp.209-211.

(12) 文部科学省「第 2 節　各分野の目標及び内容１　地理的分野の目標,内容及び内容の取扱い　(4) 地域の在り方」『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説』東洋館出版社，2018 年，pp.71-73.

(13) 前掲(12)に同じ。

(14) 工藤文三編著「第 2 章　第 2 節　地理的分野の改善と授業構成」『平成 29 年改訂　中学校教育課程実践講座　社会』ぎょうせい，2018 年，pp.58-65.